

C-77 日本人移行期後期男女の岡山地区における皮膚色調について

東京家政大家政 木曾山かね 岡山県立短大 ○古元千鶴子

東京家政大附属女子高 鈴木朋次郎 東京家政大家政 豊田直子

目的 本研究は皮膚の色と衣服の色との調和を考えるための系統的な基礎資料を得る目的を以て、研究続行中の日本人の皮膚色調に関する研究の一端をなすものである。さきに東京地区における移行期後期の色調については、第19回総会において報告した。今回は岡山地区における高校生男女生徒の色調を測定し、青年期に移行する時代の男女の性差について、考察を試みた。

方法 実験の方法は、視感測定法によった。測定月日は1972年5月下旬と、同じく6月下旬の間で、測定時の気温は23°Cより28°Cであり、湿度は68%であった。皮膚面の照度450Luxより550Luxの間であった。測定人員は15・16才男子生徒113名、15・16才女子生徒95名である。生徒の父兄の職業は、男子生徒の場合商業、会社員、公務員などが86.71%と占め、農業・漁業家庭が13.27%含まれていた。女子は農業・漁業家庭が86.84%を占めていた。服装は男女とも制服を着用し、6月よりは半袖を着用していた。

結果 男子は総体的に5・0YR系統より2.5YR系統の出現率が高く、彩度と明度の高い者が多く、明度の低い者が少ない。女子は測定時の気温が男子よりやや高かったため、若干の影響は考慮すべきであると考えられるが、色調は2.5YR系統と5・0YRの系統に出現し、明度の高い者が多かった。1967年6月中旬に測定した東京女子の色調より、明度の高い者が多く、岡山地区大学生を1971年6月測定したものと同じく色白である。